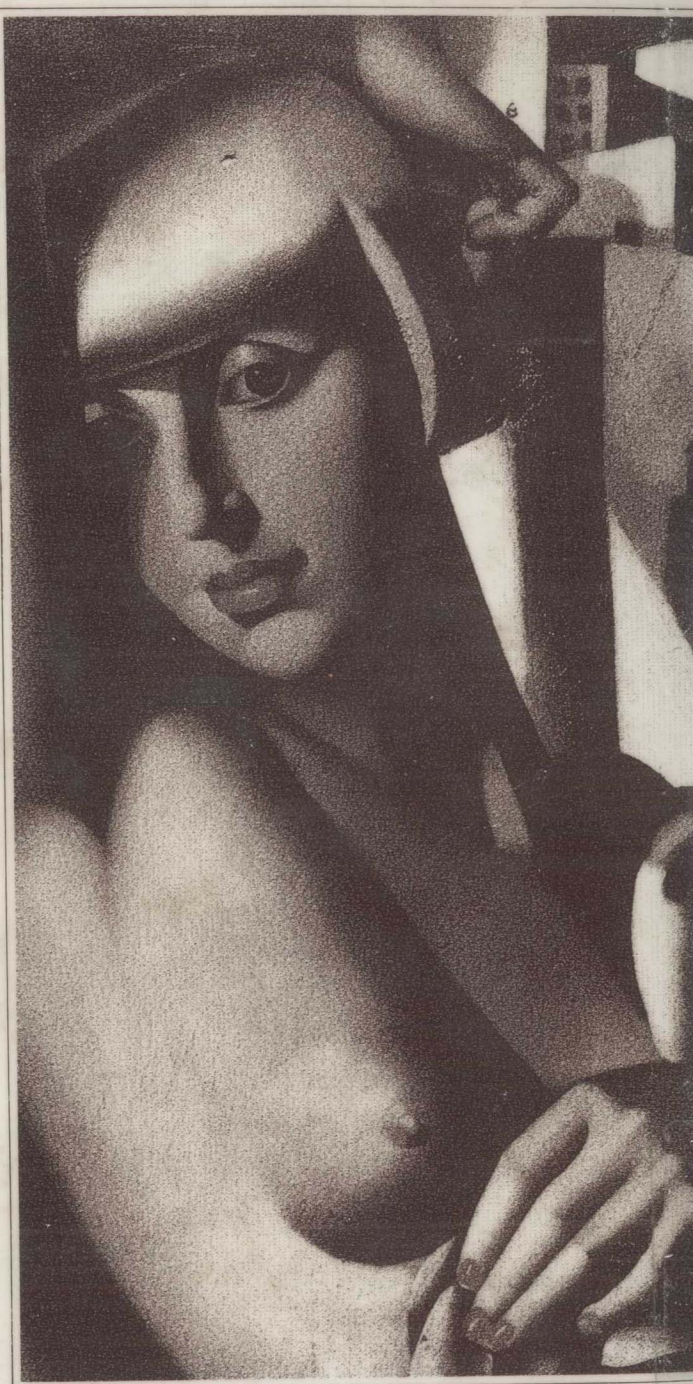


五木寛之 ワルシヤワの燕たち

つばめ

JASKÓŁKI W WARSZAWIE



ワルシャワの燕たち

五木寛之



集英社

ワルシヤワの燕^{つばめ}たち

一九九一年六月十五日 第一刷発行

著者 五木寛之^{いつき ひろゆき}

発行者 若菜 正

発行所 饅集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

編集部 (〇三) 三三三〇—六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇—六三九三

製作課 (〇三) 三三三〇—六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1991 H. Itsuki, Printed in Japan
ISBN4-08-772780-7 C0093

ワルシヤワの燕たち

「ポーランドにどれだけ滞在しますか？」

入国管理官が英語できいた。そばかすの目立つ痩^やせた青年だった。役人というより兵隊のような制服を着ていた。

「一週間」

と、私は答えた。

「ワルシャワに、シックス・ナイツ・アンド・セブン・デイズ六泊と七日」

「ホテルはヴィクトリア？」

「いや。マリオットに予約を——」

「観光ですね」

「そうです」

管理官は入国のスタンプをおすと、目で微笑して言った。

「ワルシャワへようこそ」

「どうも」

ガシャリと音がしてドアのロックがとけた。前列の旅客たちがそうしていたように、私も自分の肘で鉄の扉をおしあけて外へでた。

東欧にきたんだな、と、ふと思った。自由化の波が劇的に高まってきているというものの、やはり西側諸国へ入国するときとはちがう一種の緊張感がある。昨夜、乗りつきで一泊したフランクフルトの空港では、係官はろくにパスポートさえ見ようとしなかったのだ。もちろん入国のスタンプもおされてはいない。

通関のデスクで肥った女の職員に紙をわたされた。外貨持込みの申告用紙だった。私はキャッシュで五千ドルと記入した。ポケットのなかの日本円は書かなかった。それからガラスでしきられたロビーのほうへ迂回していった。

バスのターミナルを思わせるロビーには人があふれていた。タクシーの客引きらしい男が近づいてきて何か話しかけてきたが、私は首をふってそれを断り、背のびをして迎えてきているはずの鬼頭裕子の姿をさがした。彼女は車を用意して空港にくることになっている。三日前の国際電話で、そう約束したのだ。

へはるばる東京から逢いにきてくれるんでしょう？ それくらいサービスしなきゃ罰があるわよね

彼女はそのとき、私をからかうように電話のむこうで笑った。それは私がずいぶん長く忘れていたなつかしい笑い声だった。

私は注意して東洋人の女性をさがした。だが、ロビーにはどこにも裕子らしい姿はなかった。私はあきらめて、^{オウルビス}国営旅行社の窓口へゆき、二万円だけ両替をすませた。五パーセントの手数料を引かれて百二十三万三千二百九十ズウォチ。分厚い札束を苦心してポケットに押しこんだ。ワルシャワではすでに外貨は完全自由化されていると出発前に聞かされていたのだ。たしかに闇ドル買いらしい連中の姿は、どこにも見うけられない。

「サワキさん、ですか？」

と、その時背後で声がした。ふり返ると、一人の若い男が手に貧弱な花束をもって立っている。茶のスウェードの上衣を着て、ジーンズに汚れたウエスタン・ブーツをはいていた。スポーツでもやっていそうな引きしまった体つきだ。私より七、八センチは背が高いだろう。人の好きそうなごつい顔立ちながら、目つきにどこか知的な陰翳^{いんえい}が感じられる青年だった。

「沢木です」

私はうなずいて言った。

「あなたは？」

「ユーコの友達です。彼女が、仕事の都合で体があかくなりましたので、かわりにわたしがお迎えにあがりました」

くせのあるイントネーションではあるが、かなり達者な日本語だった。語尾をちょっと尻上りにのばす口調に、どこか女性的な感じがする。裕子とよほど親しくしているんだな、と直感的に思った。

「これを――」

と、彼は小さなバラの花束をさしだした。

「ユーコからあなたに」

「それはどうも」

彼は私のトランクを持って歩きだした。

「車は外にあります。すこし遠いところにとめました、すみません」

「わざわざありがとうございます」

私は迎えにきてくれた礼を言っただけで彼のあとにしたがった。建物の外にでると、急に視界があかるくなった。九月にしては肌寒いくらいの気温で、晴れた空の下に黄葉しはじめた樹々の輪郭がくつきりと見えた。やはりツイードのジャケットを持ってくるべきだったかもしれない。夜になれば、かなり冷えこむだろう。

「汚れた車で申し訳ないです。いそいで友達から借りてきたものですから」

青年は道路脇にとめてある赤い乗用車にキーをさしこみながら言った。それはどことなく腰高で、きゃしゃな感じのする四ドアのセダンだった。黒のサイド・ストライプをあしらったりして外見上のスポーティさを強調してはいるものの、足まわりその他はごく平凡な実用車のようなものである。泥のはねがボディのいたるところについていた。

「なんという車だろう？」

私はきいた。青年はトランク・ルームに私の荷物をおしこみながら答えた。

「ポロネーズ、といいます」

「いい名前だね」

「名前はね」

彼は両手で強くトランク・ルームをしめた。ボディがちょっと揺れた。かなりやわらかなスペンションのようだった。

「それでも新しいタイプのSLEになりますと、結構よく走るんですが——」

自分の車は先週から修理工場に入れてあるものですから普通の車を借りてきたのです、と彼は残念そうに言った。

「わたしの車は、こないだちょっと荒っぽく走らせすぎまして、排気系がおかしくなりま

したものですから」

そう言いながら、彼の表情にはかすかに得意どきいげな色が見てとれた。私はだまっとうなずいた。

「車の運転は、なさるんでしょう？」

青年がたずねた。まあね、と私は言った。どうやら裕子は私のことをこの青年になにも話してはいないらしい。そういう女なのだ。

「運転してみますか？」

青年はキーを私にさしだして微笑した。その笑顔には、どこか人を試すような挑戦的な気配があった。私は首をふった。

「いや」

「だいじょうぶですよ。ワルシャワの道路はそんなに混んでいませんから。わたしが横でナビゲーターをやりますよ」

「やめておくよ。知らない街を走るのは怖いからね」

「そうですか」

彼は自信たっぷりに運転席にすべりこんだ。

「失礼だけど、こちらにすわらせてもらっていいだろうか」

と、私は後部座席のドアをあけながら言った。前の助手席にすわるには、ちょっといやな予感がしたのである。

「なにしろジェット機のせまい座席に長時間しばらくつけられていたもんでね」

「どうぞご遠慮なく。お疲れでしたらそこで横になってください。すぐに着きますから」

私の予感は正しかった。オケンチェ国際空港から市内のホテルまでのコースを、青年は猛烈に速く走った。彼はかなりうまいドライバーだった。というより、大胆不敵、といったほうが当てているかもしれない。加速もブレーキングも常に積極的で、周囲の車の動きを予測する勘も悪くはなかった。

彼はまたまた走っている東独製のトラバントや、鈍重な大型バスをナイフのように切れ味のいい動きで追越^{パス}してゆき、信号が変わると小気味よくダッシュして車の流れをリードした。石畳の道のカーブをまがるときにも、ほとんどノー・ブレーキでコーナーの深いところまでつっこんでいき、すばやいシフト・ダウンと軽いカウンターで抜けてゆくといった荒っぽい芸当まで見せてくれた。要するに、子供、ということだ。二十年前、無分別な高校生だった私とおなじように。

「あのホテルです」

トンネルのような街路樹の下を徐行しながら青年が言った。私は青いガラス張りのモダンな高層ビルを見あげた。それは東京やロスによく見かける直線的な立方体だった。四隅を白でトリミングし、中間と上辺に黒いベルトを巻いている。LOTという文字が見えた。マリオット・ワルシャワ・ホテル。去年オープンしたばかりのワルシャワで最も新しいアメリカ系ホテルだ。

そのときふと右手前方に、もうひとつ巨大な建物が空にそびえているのに気づいた。それはクラシックともバロックとも言いようのない、じつに異様な建築物だった。装飾的な高い塔が、周囲の市街を睥睨^{へいげい}するように空にそびえている。しかし、よく見るとかなり薄汚れて、荒廃した感じもあった。たぶんこれが悪名高き文化科学宮殿なのだろう。戦後、スターリンから社会主義ポーランドの人民へブレゼントされたものだ。ワルシャワ・ガイドの本に書いてあったのを私は思い出した。前にこの建物のホールで公演したというミック・ジャガーが、インタヴューのなかで「ワルシャワという絵葉書に押されたソ連のスタンブ^ンだと皮肉を言っていたのも当然だ。モスクワ大学の建物が、そのままワルシャワに天から落ちてきたような感じがする」。

真新しいマリオット・ホテルの近代ビルと、その奇怪な文化科学宮殿とは、グロテスクな対比を見せて空に浮かんでいた。ソ連とアメリカ。片方が引込むと、もう一方が出てく

る。どっちもどっちだ。フランクフルトのホテルの壁にかかっていたサルバドール・ダリのポスターが、ちらと私の頭をかすめて消えた。

青年が車を駐車させているあいだに、私はホテルにチェックインの手続きをした。一泊百九十五ドルというのは、朝食付きとはいえ東京よりも高いかもしれない。いずれにせよ自由化というのは、そういうことなのだ。

部屋は十八階だった。荷物をおいてロビーに降りてゆくと、さっきの青年が革張りのソファーに居心地わるそうにすわって待っていた。

「どこかで一杯やらないか」

と、私は彼に言った。そしてロビーの奥のラウンジに一緒にいった。私はメニューでみつけたドンゾイロをダブルで注文し、彼はカフェ・オ・レをたのんだ。

「名刺をだす趣味はないんだが」

と、私は弁解しながら勤め先の肩書きのはいった名刺を彼にわたした。

「きょうはありがとう。おかげで、ひとりぼっちで空港について心細い思いをしなくてすんだよ。きみの名前は？」

「ブシエミスワフ・タルノグルスキです」

「ブシエ——」

「タルノグルスキ。ユーコさんはわたしのことを、大阪ふうにとよびます。プシエミスワフ・タルノグルスキ。日本人には発音しにくいでしょうから、プシエメックで結構ですよ」

「ミスター・タルノグルスキか。ロシア風の名前だね」

「いいえ。ポーランドふうの姓です。ポニャトフスキとか、ドンブロフスキとか、ナミロフスキとか、ブガイスキとか、もともとポーランド人の名前はそんなふうですから」

「知らなかった」

私は運ばれてきた最初のシェリー酒を一口で飲みほし、すぐにウエイトレスにおかわりをたのんだ。彼は私の名刺をテーブルにおいて眺めた。

「サワキ・セイイチロウ、と読むんですね」

「きみは漢字も読めるのかい」

「むずかしいです。これは何と読みますか」

彼は名刺に刷られた社名を指さしてきいた。へ「翠社・出版部編集三課」という肩書きのなかの「翠」という字のことらしかった。

「スイ、と読むんだ」

「出版社なんですね」

「うん」

それから私たちはとりとめのない話をした。彼は二十四歳で、ワルシャワ大学で社会学を専攻している学生らしい。日本語は五年間勉強したという。いつか機会があれば名古屋へ企業留学して、自動車関連産業のマネージメントを学びたいと言っていた。

「鬼頭^{きとう}くんとは、どういう知りあいなのか」

二杯目のドンゾイロを半分飲んで私はきいた。さっきから何度も口に出かかっていた質問だった。青年は答えた。

「彼女が去年の春、東京のテレビ局の取材でポーランドへきたときに、わたしがコーディネイターとして仕事を手伝ったのがきっかけでした」

そのことは知っている。たしかへ激動の東欧をゆく、とかいう特別報道番組の四週間の撮影旅行だったはずだ。あのときはワルシャワと、クラクフと、グダニスクと、それぞれの街から彼女の絵葉書がとどいた。もっともそれは彼女が帰国した後に私のところへ配達されたのだが。

「もう一杯飲んでいいかい？」

「どうぞ」

私は三杯目をジンのストレートに切りかえた。プシエメックはカフェ・オ・レのカップ

をスプーンでかき回しながら言葉をつづけた。

「ユーコが日本に帰国したあとも、わたしたちは文通をつづけていたのです。そして彼女が昨年の秋、ふたたびワルシャワにきて住みついてからは、ずっと友達です。いま、わたしと彼女とは二人だけのオフィスをつくろうと計画中です」

「オフィスって？」

「日本語の通訳、旅行ガイド、取材のコーディネイト、それから翻訳などをやる会社です。将来は映画の制作などもやりたいと思っています」

「つまり仕事上のパートナーってことだな」

私はジンの酔いが急に回りはじめたのを感じながら言った。

「きみと彼女の関係がビジネス上のものだとかわかって安心したよ。ここへ着くまでは余計なことを心配してたんだ」

プシエメックはちょっと目をふせて黙りこんだ。それからしばらくして顔をあげると、私をまっすぐみつけて言った。

「ビジネスだけの関係ではありません。わたしはユーコを愛していると思います」

「知らなかった」

と、私は言った。愛していると思います、か。少年みたいなものだ。かつて私がそうだ